

ここは天国だよ

— 認知症患者の世界と死の受容 —

大村哲夫（東北大学大学院文学研究科）

1. 本研究の目的と意義

認知症を患う高齢者の増加が社会問題となっている。認知症の症状は人格の変化をもたらすことに加え、介護の負担など本人や家族にとって深刻な問題として、忌むべきことと捉えられている。

本研究は、軽度から症状が進み死亡までの長期に亘り認知症患者への面接を継続的に行った事例の分析と考察である。セラピストがクライアントの世界を共感的に受容し支持し続けた結果、不安や混乱の表出が抑制され、死に至るまで穏やかな生活を維持することができた。クライアントの世界には、死者や過去、不在の生者などが登場し、宗教的なエピソードも混在するなど合理性には捉れない不思議な宇宙が現前していたが、セラピストがこの世界を否定することなく共有することによって、死の不安が軽減され、むしろ死の世界への穏やかな移行をもたらす援助となったと考えられる。本事例研究は、認知症高齢者に対するケアの一助になるものとする。

2. 事例の概要

80代男性。無職。特養入居。元海軍技術将校。戦後は民間の技師など。家族は、妻（死亡）と息子（別居）、娘一家（近くに居住）。

認知症。脳梗塞、心不全。大腸癌など既往。

妻と共に老人施設へ入居。妻死去後、認知症亢進、不安表出などから医師の勧めにより心理士訪問希望。その後本人の死去まで4年間、医師とは別に心理士単独訪問。1週間に1回、50分程度の個別面接。計161回の面接実施。

医療訪問導入時に研究に資する事例利用許可を得、さらに個人が特定できない倫理的配慮を行っている。

発表者は、緩和ケアを専門とする医療機関の一員として施設を訪問し面接を行った。

第1期 妻死去後の訪問開始から転居まで #1-#64

鉄道模型や創作折り紙、塗り絵などを披露し、訪問者を楽しませる。戦前戦後の思い出なども語り記憶も鮮明、ユーモアや批判精神もあり生き生きとしている。しかし高血圧などにより意識が濁することもある。心理訪問がはじまってから穏やかな時が多くなったと評価される。「理解してくれる」とのこと。積極的に外出したり、他の入居者へお土産を買ったりなど配慮ある行動が見られた。#33 女性入居者へ「結婚しよう」と言って困らせる。亡妻に似ているらしい。「感情の起伏が無くなった。腹が立ったり悲しかったりしな

くなった。奥さんが死んだ時は悲しかったが今は悲しさがなくなった。いい奥さんだった」と感情鈍麻を訴える時もある。鉄道模型も組立なくなってきた。心身の不調を訴えることも多くなり、夢の中と現実を混同することも頻繁。「最近ヒラリーさんから2回電話があった。夫が頼りないので頼まれちゃう」。

第2期 生と死のはざままで #65-#161

別の特養へ異動。新施設の居住環境はよいが、入居者の自主性尊重のためか刺激が少ないよう。#86 「(自分が) 仏さんに近づいて、お地藏さんと間違えてお賽銭おいていくんだ」「バスと電車の駅の近くに一杯飲み屋があって、そこでゆっくりするんだ、おねえさんがお銚子を持ってきてくれる」「先に行くとお墓がある。子どもと一緒に菓子を買ったりするんだ」「ここは天国だよ」など。#94 下痢。ベッドで寝ながら「船が出航する」「乗り込めと言われて乗り込んだ」「どこへ行くか分からない」#120 「お誕生会をしてくれた」「お父さんがやってくれた。初めて父親から認められた気がした」#139 学徒出陣?に参加している。#140 一本道を歩いている「引き返せないんだ」。#142 陸海軍の兵隊と一緒にいるらしい。「幸せです」#156 うなぎ釣りの話を面白おかしく語る。#161「夢と混じっているような感じ」死去。

3. 考察

1. 症状の進行に拘わらず、本人にとって「大切な思い出」は保全されている。
2. 「大切な思い出」を引出し、語ってもらうことによってQOLは向上する。
3. 意識が清明な時と「夢うつ」の状態が交互に現れ、徐々に後者の割合が高くなる。少年時代や青年時代に「今いる」かのような言動が見られる。死者が頻繁に登場し、死に関わるエピソードも度々語られるが、恐怖感はなくむしろ親しみを感じている。非合理的な話であっても本人にとっては「心的事実」である。
4. 死と生の混在する世界に遊ぶようすは、生の世界から死の世界へ不安なく移行する過程と捉えることもできる。

結論：認知症を否定的に見るだけではなく、「大切な思い出」の中に生きつつ死を穏やかに迎える過程として捉える支持的ケアが有効である。

キーワード：認知症、宗教性、死